

特 別 寄 稿

蒲原平野から消えた潟・池 ～新潟人にとって、潟とは何か～

加藤 功 外部相談員／新潟映像制作ボランティア

1. はじめに

2015年、新潟市が主催した「水と土の芸術祭 2015」市民プロジェクトに、新潟映像制作ボランティア6名の仲間と企画を練り、「新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅」で応募した。新潟市に残る16潟を鳥の眼になって空から眺めたらどのような景色になるか。空撮を、王毅（ワン・イー）氏に依頼し、地上からの映像と共に編集し「水と土の芸術祭」の会場や公民館など各地で上映した。

そこで私たちの知らない新潟の潟の不思議さ、魅力を知った。新潟人でありながら、新潟の潟とは何かを考えなかった私たちがあることに気づき、蒲原平野の潟について調べ始めた。

新潟の地名が表すように新潟は、「新しい潟」すなわち、大河・信濃川、阿賀野川と日本海の潮流、風など自然の織りなす「水」と「土」によって形成されていた。

かつて数百とあった潟や池が、現在の16潟にどの様にいつ頃減ったのか？新潟人にとって「潟」とは何か？新潟人のアイデンティティを求め、蒲原平野の消えた潟について江戸時代、明治以降、戦後について報告する。

表-1 蒲原平野（新潟市）の湖沼数

	郡誌合計	大正3年 地形図	昭和21～23 空撮写真	昭和50年 空撮写真	現在
潟池の数	約200潟	76潟	約60潟	23潟	16潟

尚、各頁に「新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅」で空撮した、普段見ない写真を掲示した。

2. 蒲原平野

2-1. 信濃川と阿賀野川

日本第一位の長さと言量を誇る信濃川は、埼玉県・山梨県・長野県の県境に位置する甲武信ヶ岳を源流として長野県では千曲川と呼び、新潟県に入り信濃川と名を変える。魚沼の河岸段丘地を抜けた後、長岡を過ぎると扇状地となり流れが緩やかになる。大河津付近からさらに速度を落とす。途中、西川、中ノ口川などを分流し、新潟市までの平野をうねりながらゆっくりと下ってゆく。

日本最大級の流量を誇る阿賀野川は、福島県境の荒海山を源流とし、会津盆地から日本海を目指し県境の東蒲原郡の山々の間を流れ下る。馬下を抜けると扇状地の平野に流れ出す。満願寺付近で小阿賀野川と分かれるが、信濃川に比べると直線的に平野を流れて日本海に注ぐ。

日本有数の二つの大河は洪水のたびに大きく流路をかえながら土砂が運ばれ、その堆積作用によって形成された低湿地の沖積平野で、水辺に生い茂るマコモやガマが生えていたことより蒲原平野などと呼ばれている。その

他越後平野、新潟平野とも呼ばれているが、ここでは蒲原平野と呼ぶ。その最下流に新潟市が形成された。



図-1 新潟県の河川と概要(出典：Google地図)

平野には細長く連続した自然堤防が分布している。西蒲原では中ノ口川・信濃川にかけて、南から北に細長くのびて分布しており、信濃川の流路がかつては現在より西側を流れていたと想像できる。北蒲原でも、阿賀野川や加治川が激しく蛇行して流路をかえていた。

この蒲原平野の海岸沿いの新潟市に住む私たちは、この真っ平らな平野を見慣れている。二十数年前に、愛媛県の知人が新潟に来た際、あまりの平野の広さと真っ平さに驚いていた。愛媛県の大洲市は、一級河川の肱川が町中をゆっくりと流れている盆地にあり、伊予の小京都と言われる落ち着いた町である。確かに10分も歩けば山裾に辿りつく伊予の盆地から見ると、蒲原平野を突き抜けて通る関越自動車道からの眺めは較べものにならない真っ平らな土地が続いている。

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-1



福島潟と飯豊山を望む内沼潟（北区）

2-2. 現在の新潟市

新潟市のホームページに、新潟市の地盤標高を表した地図（図2）が公表されている。角田山の裾から村上まで続く新潟砂丘が北に延びている。そして新潟市の大半は標高3m以下にあることがリアルに描かれている。

まるで蒲原平野は信濃川と阿賀野川が押し出す水の湾になっている。これはどこかで見た絵図ではないかと思案すると、平安越後絵図に類似する光景である。

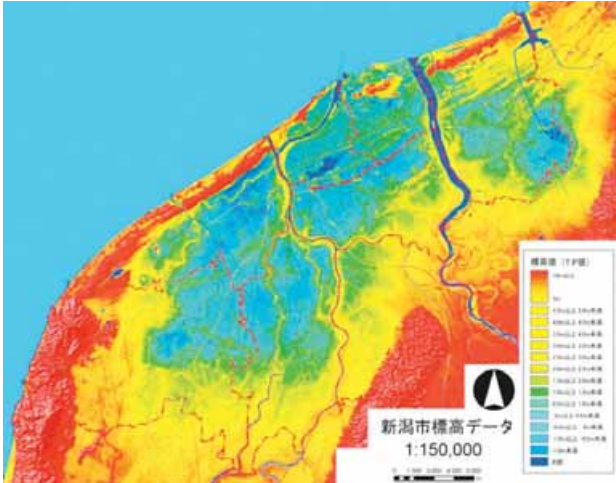


図-2 新潟市地盤標高(出典：新潟市ホームページ)

2-3. 平安越後絵図

この絵図は、平安時代の越後国の様子を描いた古地図と称して広まり、江戸時代に大量に複製され、新潟県内の市町村の歴史書の巻頭を飾った地図である。

康平3（1060）年の年紀を持つ「康平図」と、寛治3（1089）年の年紀を持つ「寛治図」があり、現在確認できるだけで約50点あると言う。

現在これらの絵図は、平安時代に作成されたものではなく、近世に創作された絵図であるという考え方が一般的になっていることは承知しているが、創作した当時の人の想像力の豊かさには脱帽しかない。蒲原平野の標高が3m下がると、この地図に近い地形になることは誰がみても想像がつく。



図-3 寛治3年越後絵図(出典：白根治水史)

2-4. 蒲原平野

平野の海岸側には、70 kmにわたって砂丘が発達しており、新潟砂丘と呼ばれている。数多くの砂丘列があって、それらが海岸線にほぼ平行に分布しているのが大きな特徴である。

現在、信濃川、阿賀野川の二大大河は河口を別々にしているが、江戸時代初期には二つの川の河口は一つであった。当然信濃川、阿賀野川の水はこの真っ平らな蒲原平野に流れ込むが、海岸の砂丘帯が内陸からの川の流れを阻害した。出口を失った水は、内陸部に多くの潟や湿地帯を誕生させた。越後の潟は、その成立過程で川が最も大きな要因を占めている。



図-4 1600年後半の越後の潟湖(出典：信濃川治水の歴史)

鳥の目で訪ねる新潟の潟-2



角田山を望む佐潟(西区)

3. 江戸時代の潟の新田開発

江戸開幕から百年、世の中が平和になって落ち着き人口が増えた中、大飢饉が次々におき、食糧不足が一層増えていった。そのため江戸幕府は、荒地を開墾して食糧増産する必要に迫られた。また各藩でも河川改修と治水事業による新田開発が盛んに行われた。

享保7（1722）年、八代将軍徳川吉宗による享保の改革で町人請負による新田開発を奨励した。この改革は、開発者の利益を大幅に認め、最初の3～5年間年貢を免除した。その後の年貢率も本田よりは低く算定され、新規参入のハードルを低くしていた。

越後では、信州出身の竹前権兵衛・小八郎兄弟が、紫雲寺潟の新田開発を幕府に願ひ出た。

3-1 紫雲寺潟干拓

紫雲寺潟は塩津潟とも称され、かつてその広さは、旧紫雲寺町・中条町・加治川村に及ぶ下越地方最大の潟湖であった。弓の様な形をし、湖面標高約6m、湖底標高約3m、と比較的浅く東西8km、南北4km、広さ約二千町歩（面積約2,000ha）の大きさであった。

潟は大小多数の河川が流れ込んでいた。潟の南端は加治川と接し、境川でつながれていた。北側は海岸砂丘があり、潟の水を海に流すことを拒んでいた。また反対の山側は、楯形山脈の際からなだらかに潟へ落ち込んでいた為に、東縁一帯は潟の氾濫の常襲水害地となっていた。

歴代の領主はこの潟の治水に苦心していた。この為、荒川への排水路や海まで直接海岸砂丘帯を掘り割る長者堀の開削を試みたが、砂崩れのため失敗した。

享保6（1721）年、新発田藩は潟廻り45ヶ村庄屋より嘆願されていた長者堀の再掘りを行った。この結果、紫雲寺潟の水は減少したが、加治川の水が境川を通して激しく流入して境川の両岸堤防が決壊、胎内川の水も潟に逆流するようになった。風による堆積と両岸の砂崩れで堀の深さも7尺(2.2m)と浅くなり、用をなさなくなった。それ以後、長者堀は落堀川となった。



図-5 紫雲寺潟干拓絵図(出典：信濃川治水の歴史)

竹前兄弟は全財産を投資し、また江戸で旅籠をしていた会津屋佐左衛門、柏崎の宮川四郎兵衛の出資協力を受け、享保13（1728）年、長者堀の再掘削に延べ3万人を動員し、1ヶ月で約2.6km、幅36m、深さ4mを開削したほか、加治川からの流入を締め切る工事（境川の締切）を完了させた。

この干拓は町人請負干拓であったが、幕府の勘定吟味役井沢弥惣兵衛為永の指揮によるものであった。

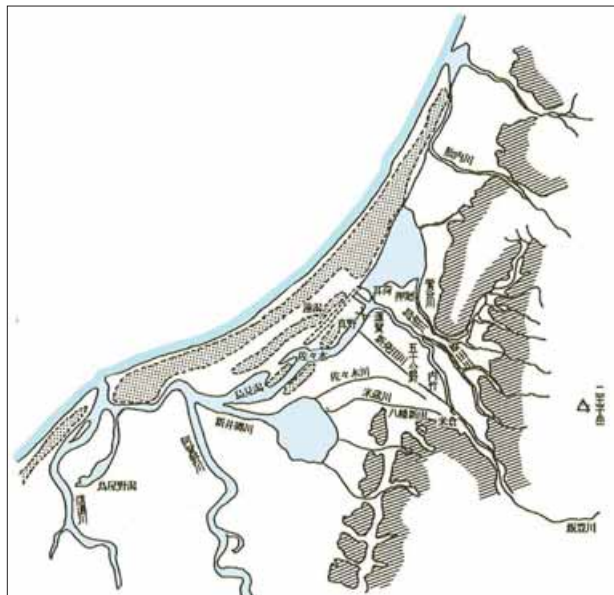


図-6 紫雲寺潟干拓前の北蒲原(出典：新潟県治水の歴史)

その後、弟の小八郎が病気で亡くなるが兄の権兵衛は、最後の工事となる今泉川を締め切って、姫田川、加治川へ流す工事を続けようとしたが資金が底をついた。権兵衛は幕府に支援を求めたが、私的事業の限界と見た幕府は、この瀬替え工事を引き継ぎ、享保17（1732）年に近隣の人々に請け負わせて工事を完成させた。

この年の春には雪解け水と大雨が大増水となり、長者堀の両岸を決壊させ、河床が下がり広大な湖底が姿を現した。これらの工事や洪水などで、紫雲寺潟の大半が干上がり、周辺には42の村々が誕生した。

現在は紫雲寺潟の跡には日本海東北自動車道が通り、かつての面影を偲ぶものは見当たらない。

鳥の目で訪ねる新潟の潟-3



飯豊山と五頭連峰を望む福島潟(北区)

3-2. 松ヶ崎放水路掘削

松ヶ崎掘削は当時の新発田藩主溝口直治が、紫雲寺潟新田開発、及び加治川、阿賀野川増水時の排水促進のため、幕府の許しを得て洪水時の放水路として開削された。

享保 15 (1730) 年 8 月 23 日着工、全長 385 間 (約 700m)、幅 30 間 (約 55m)、分岐点の幅 75 間 (約 136m) 人足累計 115,663 人によって 10 月 14 日に完成した。

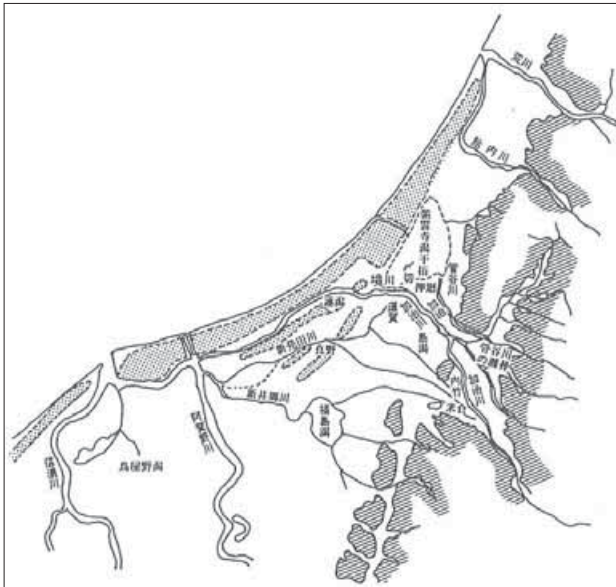


図-7 紫雲寺潟干拓後、松ヶ崎開削 (出典：新潟県治水の歴史)

石蛇籠によって高さを平水位に保ち、また石蛇籠は川底に設置し、現在の床固めのような機能を持たせた。一方開削した法面や流入口は萱羽口で施工し、開削部分の保護工は全延長ではなく掘り割り口より 100 間だけ施工した。



図-8 阿賀野川悪水抜き掘削絵図 (出典：図説新潟市史)

この掘削は、阿賀野川洪水の悪水吐きとして出来たもので、常水は絶えず新潟港へ送らねばならない約束で、分水路の呑み口には常水面走杭・悪水落ち掘り割り床走杭を打ち込んで、新発田側・新潟側ともに嚴重にこれを監視することを決めた。

しかし、翌年の享保 16 (1731) 年、雪融けによる阿賀野川の洪水は予想外に激しく、掘削を破壊し、川幅を 30 間から 160 間 (約 288m) ~ 200 間 (360m) と一気に 3 倍に押し広げ、水深も 2 丈 2 尺 (約 6.6m) から 3 尺 (約 9m) になり、開削したばかりの掘削を阿賀野川本流と化した。



図-9 阿賀野川掘削決壊絵図 (出典：図説新潟市史)

そしてこの日を界として、新潟港の水深は日毎に浅くなり、新潟港の苦難時代が始まった。

これに対し北蒲原の水はけが良くなり、鳥見潟は干上がり、福島潟一带の水位も下がり、新田開発が進んだ。また、阿賀野川の水位が約 6 尺 (1.8m) も下がった。福島潟南岸の岡方五十三か村は、松ヶ崎決壊以前から用水不足に悩まされていた。この水位低下で阿賀野川右岸では用水の確保が出来なくなった。その為、上流 33 km の安田より新江用水を 2 年の歳月をかけて引き、918 町歩に供給することになった。

他方、潟の水さえ引けば新田開発が進むことが実証されたことにより、蒲原平野の各地に大規模新田開発の機運が高まっていった。

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-4



五頭連峰を望む十二潟 (北区)

3-3. 大低湿地帯だった西蒲原郡三潟地方

西蒲原郡の西南は信濃川、東南は中ノ口川の堤防、西部は弥彦山山塊、北部は海岸砂丘に囲まれた不完全輪中地域である。東西約 14 km、南北約 32 km に亘る長方形で海側に西川が流れ、平島で信濃川に注いでいた。

西川沿いの新潟市西部や旧西蒲原郡西川町・巻町には、江戸時代、大小の潟湖が点在する広大な低湿地帯が広がっていた。西川と中ノ口川の間にある最大の潟は鎧潟で、その下流には田潟、大潟があり三潟といわれた。これらの潟は遊水池と同時に、用水溜の役割を果たしていた。

鎧潟よりの下流の勾配は、8 km 歩いてようやく 1 m 下がるといふ平坦さであり、標高もほとんど 1 m 以下の湿地帯であった。



図-10 三潟地方概念図(出典：新潟市史通史編4)

これらの地域の大部分は長岡領であったが、幕府直轄領をはじめ、村上領、新発田領など藩もの領地で分割・管理され、治水対策も各藩独自で対応していたため、全地域を一丸とした根本的解決策は講じられていなかった。

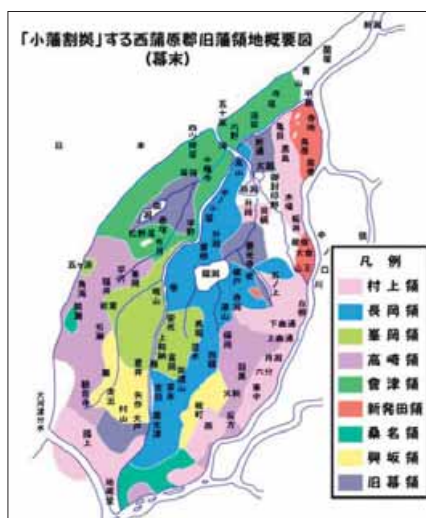


図-11 三潟周辺の領地概要図(出典：新潟市潟環境研究所)

鎧潟には、大通川・飛落川・木山川などが流れ込んでいた。排水路は早通川のみであった。西川は長年の土砂の堆積で川床が高い通称「天井川」となっていたため、早通川から西川への水はけが悪く、大雨の際は逆流を避けるために自ら水門を閉じた。

西川の水位が下がらなければ水門を開けることは出来ず、雨が上がってもなかなか田んぼの水は引かず、この地域の水は「悪水」(湛水被害)と呼ばれた。長期間にわたる湛水被害により、収穫の喜びをみることは稀であった。

反面、夏の渇水期には西川の枯渇による干害も受け、三潟地方は洪水と渇水という二つの水害に悩まされる常襲地帯であり、江戸時代から戦後までの 350 年間に 100 回(ほぼ 3 年に 1 回の割合)の洪水に見舞われていた。



図-12 新川開削前の三潟周辺図(出典：信濃川百年史)

3-4. 御封印野の開発

三潟地方の鎧潟から田潟へ通じる早通川右岸側の一角は、「御封印野(ごふういんの)」と呼ばれ、三潟地方を洪水が襲った際の遊水池として、幕府が右岸一帯の開発を禁じていた場所があった。

享保期に至り、幕府は財政建直しのために新田開発を積極的に推進した。この政策に応じて、御封印野も注目され、他国より開発をもくろむ人々が出てきた。

鎧潟縁辺の 37 カ村は、遊水地がなくなり、悪水が吐けきれなくなると反対を続けた。しかし、次々と開発願人が現われてきたので、結局 37 カ村の方から開発願いを出し、延享 4 (1747) 年に工事を開始した。

工事は土手を築き、周辺からの水を拒否する方法で行われた。遊水地が縮小するので、鎧潟の水を排水する水路の開削も同時に行った。工事開始 4 年後の宝暦元年に検地が行われ 3,400 石の新田となった。

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-5



砂丘の松林の中にあるドンチ池(西区)

3-5. 新川開削

「悪水」(湛水被害)に悩む西蒲原では、天井川の西川の下に三濁の水を日本海に直接放流する新川掘削工事を70年間に9回請願した。だが、いずれも松ヶ崎開削で信濃川の水量減少を経験した新潟町の反対により、許可されなかった。

長年の努力が実り文化14(1817)年、長岡藩、新発田藩の願人18名によようやく許可が下りた。

翌文政元(1818)年、三濁悪水抜きの新掘割は、大濁から五十嵐浜まで、長さ約2,400間(約4.5km)、堀幅10間(約18m)、両岸の堤敷は各10間(約18m)であった。長岡領願人と村上領願人の工事分担は、大濁から西川までの約940間が村上領願人、西川から海までの約1,560間が長岡領願人であった。架橋は北陸道の往還橋も含め九ヶ所であった。



図-13 内野新川開削全体図(出典：新潟市史より作成)

掘削工事は、金蔵坂と呼ばれる高さ11間(約20m)の開削は難工事であった。毎日何百人もの人足が、砂を「かつぎもっこ」や「背負いかご」に入れて列をなして運ぶ外なかった。底樋の敷設工事は西川の下に掘割の水を通す樋管を埋めて、西川と掘割を立体交差させるものであった。西川に敷設する底樋は木製樋管二門(高山側の底樋は長岡領、榎尾側は村上領が1門ずつ担当)で、新潟町との約束により西川の通船に支障のないようにして工事は進められた。またここは低湿地であるため地下水位が高く、踏み車を4~6台ずつ10段、合計50台以上で地下水を排除しながらの工事であった。

2年の歳月と延べ人足165万人、総工費2万6千両をかけて文政3(1820)年1月、厳冬のさなか、大勢の人々が見守る中で二門の底樋の通水式が行われ、三濁の悪水が掘割から海へ排出された。

この効果により大濁・田濁の多くの濁は減水して約140haが良田と化し、築千坊新田・貝柄新田などの新しい村ができあがった。その後も底樋の増設を重ねたが、西蒲原のお盆の底にあった鍮濁の完全干拓は、それから約150年後であった。

3-6. 中蒲原郡白根郷

白根郷は東を信濃川、西を中ノロ川に囲まれた巨大な輪中地帯で、白蓮濁(長さ13町(約1.4km)、横12町(約1.3km)、深さ6尺7尺(約2m))や大濁があった。また、菱濁、鍋濁、平濁、舞濁、丸濁の地名が今でも残るくらい白根郷には、多くの濁があった。

白根郷は南から北へ向かって緩やかに傾斜する地形で、水田部の標高は最高で6m、中央に位置する白根で3m、最低の根岸で1mである。この5mの標高差は、他から比べると比較的標高差のあるめぐまれた地形であった。

新発田藩による治水工事は、濁縁に新江丸を掘り囲堤として内外を遮断し、その後、濁内部の最深部に水路を築き内部の水を集め、専用排水路を掘って濁外へ排出した。濁は極窪地であるから、自然排水をするためにはより深い排水路を掘って、常に濁内の水位より低くしておく必要がある。専用排水路は勾配をつけて標高の低い下郷に向かって延々と掘られ、水位が同一になる地点で大通川排水路に流された。寛政12(1800)年、白蓮濁は干拓された。



図-14 正保越後国絵図(出典：白根郷治水史)

太婦濁は大通川排水路流末に近い根岸にあった。面積は周辺合わせて890町(約883ha)の広大な低湿地であった。だが、標高が約0.6~1.2mの湿地帯であったため、江戸時代の自然排水での治水工事による干拓は無理であった。明治44年、鷲ノ木大通川に白根排水機場ができてようやく太婦濁の干拓が行われた。

鳥の眼で訪ねる新潟の濁-6



角田山と柿団地が眼の前の仁箇堤(西蒲区)

3-8. 中蒲原郡新津郷

新津郷は、東を阿賀野川、西を信濃川に囲まれ、小阿賀野川によって下流側の亀田郷と隔てられていた。郷内を南東から北へ能代川が流れ、南には新津丘陵がある。かつてこの新津丘陵下に、信濃川の蛇行跡が潟となったと思われる鎌倉潟、大日潟を始め大小の潟や湿地帯が広がっていた。

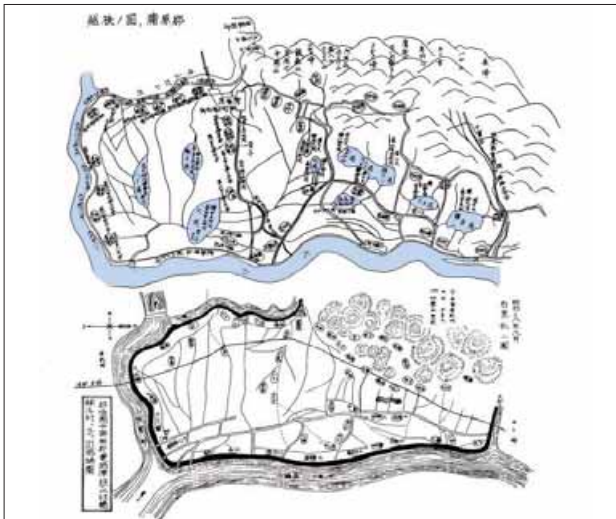


図-17 新津郷の潟、水路(出典：新潟県治水の歴史)

鎌倉潟は江戸時代初期の宝永2(1674)年頃に新発田藩によって干拓された。その後大通川の整備を行い郷内の水を集めて信濃川に排水した。

3-9. 蒲原平野の米生産

慶長3(1598)年越後の国の石高は45万石であった。正保2(1654)年の検地では61万石に増え、元禄15(1702)年には81万石へ、更に天保5(1834)年には114万石へと飛躍的に伸びている。

特に蒲原郡は正保2(1654)年21.4万石から元禄15(1702)年では1.5倍の30.1万石に伸びた。明治元年には越後の国の115万石の半分近い53.7万石が、蒲原郡からの収穫であった。蒲原平野の潟や湿地帯の干拓が多く行われたかが分かる。だがそれは江戸時代の干拓技術の到達点であり限界を示していた。

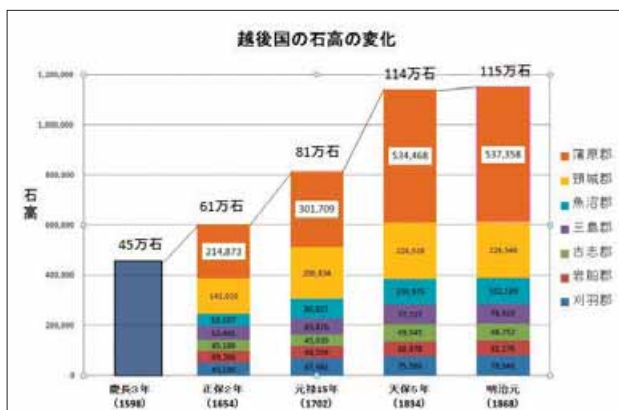


図-18 越後の石高の変化(出典：長岡歴史博物館資料)

蒲原平野は信濃川、阿賀野川の下流域であるため一部を除き水の確保にはそれ程苦労は無かった。そして潟は大雨が降った際の湛水を貯めておく遊水地であり、用水の為のため池の役目をはたしていた。越後の有り余る湛水は「悪水」と呼ばれ、「水」は、いかにして早く下流に流す対象でしかなかった。だが、潟に生息する魚や植物などの産物は、地元の重要な栄養源であり、収入源でもあり、生業であったため潟を大切にしていた。

3-10. 越後土産の潟番付

番付は17世紀中頃に歌舞伎などの興行に伴い、宣伝用のパンフレットとして印刷された。やがて相撲興行でも作成され、力士、行司などの階級・地位を東西に分けた一覧表で示す「相撲番付」が生まれた。

その後、番付は名所や土産比べなど、庶民の関心が高いものを題材に、序列をつけて番付表となった。越後でも流行し、越後国内での産物・名物・山・川が作られた。



図-19 越後土産番付表(出典：新潟県立文書館蔵)

新潟県立文書館にある明治中期に印刷された「越後土産の川・池・潟」には、別格扱いの行司に福島潟、鏡潟がランクされ前頭には、蒲原郡の名立たる潟が記されている。だが、現在調べても分からない潟が多くある。それだけ蒲原には多くの潟があった事を意味している。

鳥の目で訪ねる新潟の潟-8



新潟市秋葉区-能代川土手下の北上の池

3-11. 江戸時代、越後で干拓された潟湖

江戸時代中・後期に、紫雲寺潟干拓や松ヶ崎開削、内野新川を開削し、用水路の整備により、越後での新田開発が行われてきた。

北蒲原では岩舟潟、紫雲寺潟（塩津潟）、島見潟、中蒲原では鎌倉潟、白蓮潟、上道潟、下道潟など大きな潟が姿を消していった。

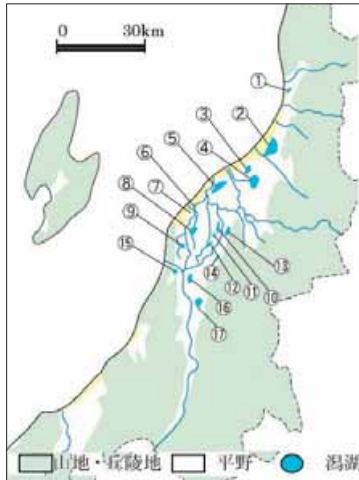


図-20 越後で干拓された潟湖
(出典：新潟県の治水の歴史)

表3 江戸時代に新田開発された越後の潟湖

名称	着工年	完了年	備考
1 岩舟潟	天明元年(1781)	天明8年(1788)	天明年間(1781~1788)までに干拓された
2 紫雲寺潟(塩津潟)	享保13年(1728)	享保18年(1733)	享保18年(1733)落堀川の開削により全面干拓
3 島見潟	享保16年(1731)	享保16年(1731)	松ヶ崎放水路の本流化により干陸化した
4 福島潟	享保16年(1731)		松ヶ崎放水路の本流化により周辺が干陸化し、干拓に着手されるが、現在も水域が残る
5 鳥屋野潟	享保元年(1716)	享保20年(1735)	享保年間に干拓に着手されるが、現在も水域が残る
6 大潟	文政3年(1820)	昭和25年(1950)	新川放水路により干陸化 1950年頃全面干拓完了
7 田潟	文政3年(1820)	昭和25年(1950)	新川放水路により干陸化 1950年頃全面干拓完了
8 鏡潟	文政3年(1820)	昭和41年(1966)	新川放水路により干陸化 1966年頃全面干拓完了
9 楊枝潟	昭和14年(1939)		樋管山隧道の完成により干陸化
10 白蓮潟	寛政元年(1789)	寛政12年(1800)	寛政年間に干拓
11 上道潟	弘化元年(1844)	弘化4年(1847)	弘化年間に開墾された
12 下道潟	弘化元年(1844)	弘化4年(1847)	弘化年間に開墾された
13 鎌倉潟	宝永2年(1674)		宝永2年頃干拓された
14 大月潟		安政6年(1859)	江戸時代中期に始まり、安政6年完了
15 赤沼潟	延宝元年(1673)	延宝8年(1680)	延宝年間に干拓された
16 円上寺潟	文化12年(1815)	明治16年(1833)	明治16年一応完了
17 八丁潟	宝暦元年(1751)	宝暦13年(1763)	中央は明治前期まで水域として残存

(出典：新潟県の治水の歴史)

4. 明治以降に消えた潟



図-21 1600年代の蒲原平野の潟
(出典：絵図が語るみなと新潟)

蒲原平野は江戸時代後期にかけて、低湿地を開墾することによって、各地に多くの村々や在郷町が成立した。

だが、人力による開発の限界を悟った時代でもある。明治を迎えても、蒲原平野の大部分は低湿地が占めていた。明治以降、人力から排水機により「悪水」を排除した農業が明治に行われたが潟を干拓し、本格乾田化したのは終戦後であった。

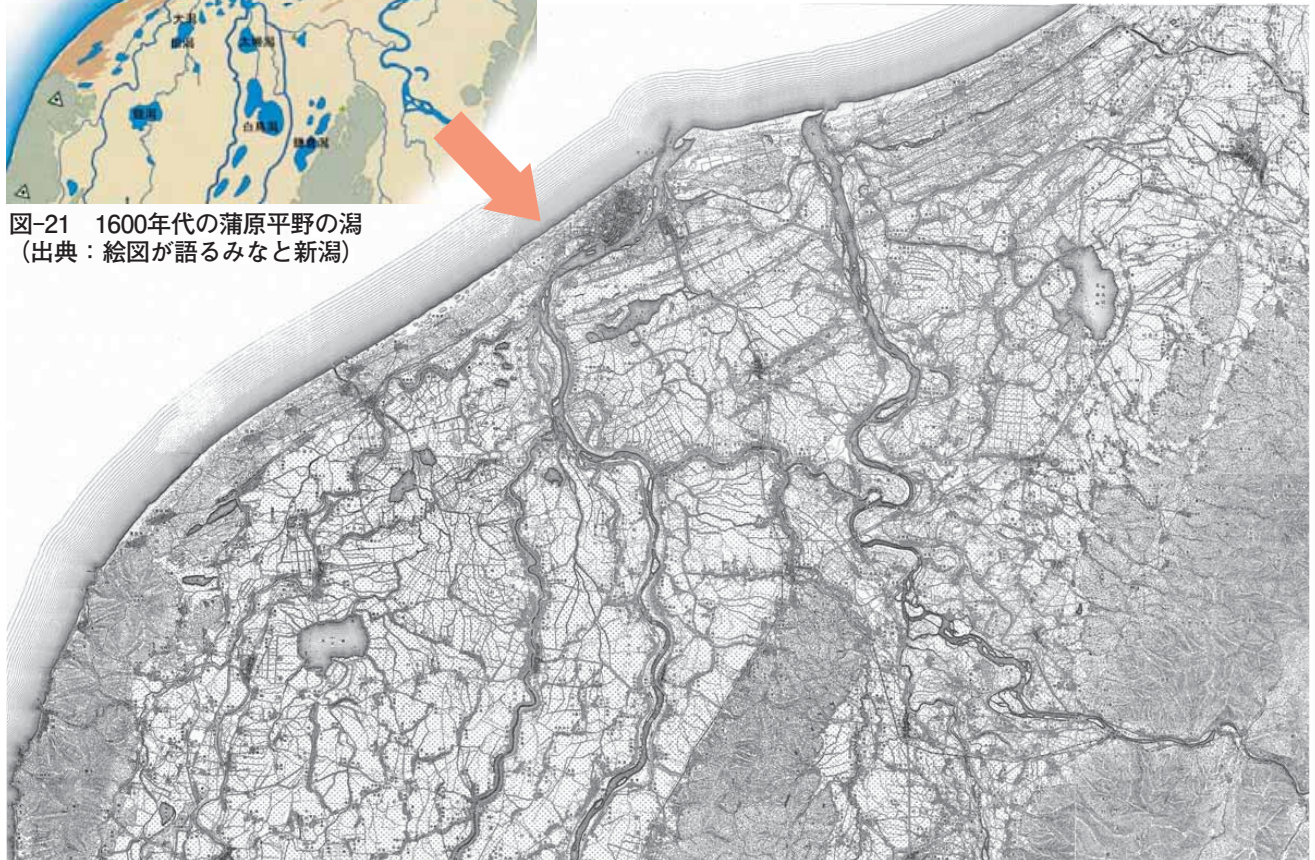


図-22 明治末期の蒲原地形図 国土地理院5万分の1地形図(出典：国土地理院 明治44年測図)

4-1. 明治以降の排水機場建設

蒲原平野では、機械排水が行われる以前は、排水路の流末に水門を設けて、排水を出す先の河川が増水したときに逆流を防止するしかなかった。

明治以降、特に大正時代から地元のメーカーが製造した蒸気機関による排水機場があちこちに設置された。



図-23 明治25年、日本最初の旧巻町内沼排水機場
(出典：西蒲原郡土地改良区 写真集)

排水機が設置されると、排水機によって水位の下がる区域内にある「内水」と、その外部の「外水」との区分をはっきりさせる必要が生じ、境となる囲い土手が整備されるようになった。これらの排水機は、数力村単位の小地域ごとに耕地を所有する地主が設置した部分的なもので、大きな潟を干拓するまでには至らなかった。



図-24 蒸気機関を使った排水ポンプ(出展：しんかわ)

亀田郷の地主たちは、秋の収穫期になると経費を節約するために機械排水の運転を停止していた。そのため秋の刈り取り作業は、水位の高い田の中でおこなわれた。刈り取りの季節が終わった水田地帯には、「地図にない湖」と呼ばれるほど、広々とした水面が広がっていた。

4-2. 横田切れと大河津分水分水路開削

江戸時代の享保年間に、信濃川の放水路を三島郡旧大河津村付近に設け、日本海へ分流させる大河津分水の計画が立案されていた。

明治3(1870)年、信濃川の水位が下がることを懸念する新潟町や農民らの反対をおして実施したが、当時の技術水準から実施が困難とされ明治8年中断した。

その後明治29(1897)年の「横田切れ」水害を契機に工事の再開を求める動きが本格化し、明治42(1909)年に工事は再開し、13年後の大正11(1922)年に通水した。

その後自在堰が壊れて下流域の農業や舟運に影響を与える事故もあったが、昭和6(1931)年可動堰が完成した。大河津分水によって、分水下流の信濃川の水量調節が可能となり、蒲原平野の洪水がなくなった。

4-3. 新川暗闇建設と三潟

文政3(1820)年1月新川が開削されたが、中ノ口川と西川に挟まれたお盆の底にある西蒲原の、悪水の根本対策には至らなかった。明治43(1910)年から始まった西川改良及び新川底樋改造工事は、西川の舟運を確保しながら近代的な暗闇に改造した。アーチ部には煉瓦を使い、川底には花崗岩を敷き、側壁を鉄筋コンクリートで構築し、アーチ型九門の暗闇に海水の逆流を防ぐため木製扉2枚づつを全暗闇に取付けた。

これによりこれまでの3倍の通水能力となり、戦後の大潟、田潟の干拓とその後の鎧潟干拓に繋がった。



図-25 完成した新川暗闇(出典：西蒲原土地改良区)

表-4 新川底樋と通水能力

年次	事項	主要工事	事業費	新川の川幅	門	断面指数
1818~1820		新川掘削、底樋2門	2.6万両	10間	2	100
1826		川幅拡張、1門増設	300万人	15間	3	200
1833~1835		川幅拡張、2門増設	1万2千両	25間	5	333
1867		底樋新設、逆水門	7万4千両	25間	5	375
1902~1912		煉瓦コンクリート暗闇	20万7千円	37間	9	1125

(出典：西蒲原土地改良区)

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-9



阿賀野川土手下の六郷の池(秋葉区)

4-4. 明治以降の耕地整理

江戸時代以降、少しずつ湿地帯を開墾してきた水田は、一枚が小さく形も不揃いで、道や畔も曲がっていた。また各所有者の田は分散していた。こうした耕地の形状や所有の無秩序は、生産性の向上を妨げていた。食糧増産の気運が高まり、耕地を合理的に区画するため「耕地整理法」(明治32)年に制定されると、耕地整理が全国各地で行われるようになった。だが蒲原平野では、水はけのよい微高地の乾田地帯での耕地整理のみであった。

この後大河津分水の通水によって、平野の各地で湛水の排除が可能となると耕地整理は、それまで水はけの悪かった地域も含めてより広域的に行われるようになり、潟と潟とを結ぶ水路と舟は、蒲原平野の農業にはなくてはならないものになっていった。



図-26 蒲原農業の必需品であった田舟(出典：ありし日の鎧潟)

昭和初期の蒲原平野では用排水路の整備・耕地整理・潟や原野の開墾などの土地改良事業が本格化する。これらは大河津分水の通水といった大規模な土木工事の完成が契機であった。

5. 戦後に消えた蒲原平野の潟

戦後の蒲原平野は、国営事業として圃場整備と排水機場が設置されるとその能力は絶大で、みるみる間に低湿地帯が乾田化されていった。用排水路網の整備により干拓された潟の跡地は農地となったり工業団地となったり、住宅地が変わっていった。

一例として、昭和23年、当時東洋1と言われた栗ノ木排水機場が整備され稼働すると、鳥屋野潟の水位が1mも下がり、周辺の湿地帯が乾田化した。



図-27 栗ノ木川排水機場(出典：写真は語る亀田の百年)

また西蒲原では戦後、排水機場の再整備と機械化の促進によって昭和23年田潟、大潟が干拓された。更に新川右岸排水機場及び旧広通江排水機場建設による圃場整備により昭和43年最後となった鎧潟も干拓され、現在の様な西蒲原の穀倉地帯となり、人々の記憶から忘れ去られていった。



図-28 鎧潟の潟縁に建つ碑(筆者撮影)

遊水地や用水の役目を終えた潟の周辺は、徐々にゴミ捨て場となり、地域の人々の記憶から消えていった。

潟の魚や植物などの産物は、地元の重要な栄養源であり、収入源でもあり、生業であったが、食生活の変化と共に食卓にのぼらなくなり食べなくなった。

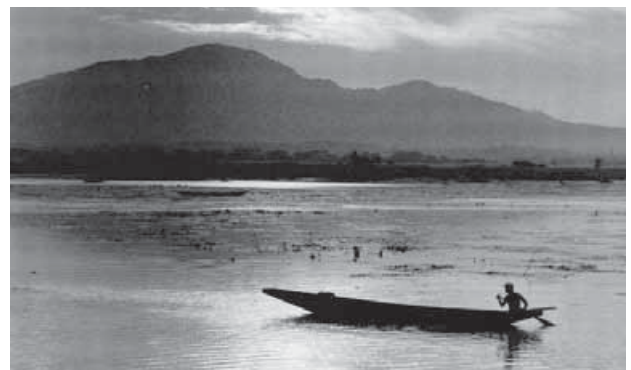


図-29 鎧潟での漁(出典：ありし日の鎧潟)

これまで蒲原平野の潟の存在は、郡誌や地形図で確認して来たが、戦後は航空写真も使って、いつ頃埋め立てられたのかを知る手掛かりとした。

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-10



角田山を望む上堰潟(西蒲区)

5-1. 新潟空港管制塔になった古潟

明治 23 年に大日本帝国陸軍参謀本部陸地測量部が測量した 1/20000 の簡易迅速測図「松筒崎濱」がある。



図-30 明治23年測量の松筒崎濱迅速図(出典：国土地理院)
この地図には、阿賀野川左岸の現在の新潟空港の管制塔の付近に「古河」と記述のある池が描かれている。

調べてみると明治 16 年に新潟県が調査まとめた統計書があり、そこに「新潟県内の池沼湖ノ周囲面積」一覧があり、古川跡が載っている。

表-5 池沼湖ノ周囲面積 (出典：新潟県統計書 M16 年)

名称	所属地名	周囲(km)	面積(ha)	廣(m)	表(m)
福島潟	北蒲原郡	9.16	318.5	1,962	2,747
古川跡	"	3.49	11.0	33	1,635
鳥屋野潟	中蒲原郡	7.31	157.0	2,747	807
焼島潟	"	3.38	50.0	355	338
浦潟	"	1.64	17.0	437	372
大潟	西蒲原郡	2.94	65.0	687	767
田潟	"	3.27	71.0	807	808
鏡潟	"	9.38	555.0	2,311	2,333
浦潟	"	1.64	13.0	234	545
白鳥潟	"	1.74	16.0	600	240
二枚目潟	"	1.42	12.0	349	338
的場潟	"	1.42	13.0	447	281
楊枝潟	"	1.96	28.0	360	594
上堰潟	"	2.83	28.0	355	717
千ノ潟	"	1.31	14.0	339	436
乳ノ潟	"	1.64	15.0	330	436
佐潟	"	3.38	46.0	365	1,341

※本資料は周囲を里、面積を町、廣を里で表記していたが、周囲をkm、面積をha、廣と表(ポウ)をm表示にした

現在の新潟市周辺では北蒲原郡で2、中蒲原郡で3、西蒲原郡で12の池沼しか載っていない。もっと多くあったはずである。西蒲原郡の浦潟、千ノ潟は場所は不明。

その後松ヶ崎濱村からの約6万坪と新潟市からの約33万坪の土地の寄附を受けて昭和15年、「通信省新潟地方航空機乗員養成所」が開設された。当時池のそばに料亭花月があり「花月池」と呼ばれていた。

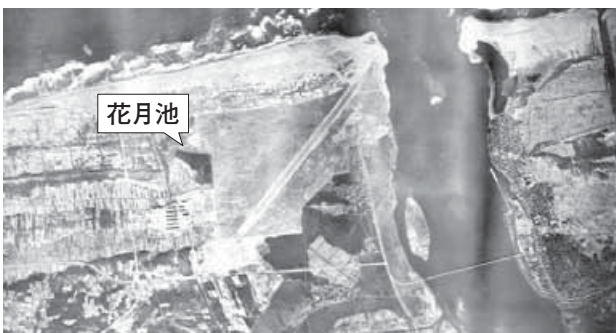


図-31 昭和21年米軍撮影の新潟空港(出典：国土地理院)

新潟地方航空機乗員養成所によると、池は南北約170m、東西約250mであった。また終戦間近の昭和20年5月、あまり知られてはいないが、陸軍航空隊の米沢隊(隊員約80名)が来て、夜間特攻訓練を行っていた。



図-32 複葉練習機で生徒が操縦訓練中下に花月池が見える(出典：新潟地方航空機乗員養成所)

そして終戦後の昭和20年8月米軍空軍に接收され、北向きの1,829m×45mのA滑走路が建設された。その後将来に備え1,200mのB滑走路を新設した。昭和47年ジェット化のため、B滑走路1,900mに延長した。そのため池周辺は埋め立てられ池は無くなった。年間約100万人が利用する新潟空港、花月池を偲びながら阿賀野川岸から日本海に向かって飛び立つ飛行機を見送る。皮肉にも池が埋め立てられた時期、阿賀野川の対岸の松浜に、河口閉塞湖の「松浜の池」が誕生し早50年となる。



図-33 昭和47年阿賀野川河口と新潟空港(出典：国土地理院)

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-11



阿賀野川の押し出す土砂と日本海の潮流で出来た松浜の池

5-2. 川の一部となった焼島潟

図-34の通船川地域は、古くから蒲原の津として貢米の舟出港として発展した。享保15年、阿賀野川の松ヶ崎堀割工事と翌年の雪どけ水により、阿賀野川の本流の河口が松ヶ崎に移ったことで旧阿賀野川の河道跡が焼島潟となった。以来通船川は、新潟、沼垂から岩舟、新発田方面への重要な水上輸送路となった。



図-34 明治23年2万分1迅速測図(出典：国土地理院)

焼島潟は、「大字沼垂、蒲原の北方に在り、東西約拾式街、南北約四町、周囲約参拾五町にして通船川及び新栗ノ木川を合せ、餘水北西に流れて信濃川に入る」と中蒲原郡誌に書かれている。



図-35 図-34を拡大(出典：国土地理院)

焼島潟の面積は約12万坪(39万6千㎡)の広大な水面で、山ノ下・沼垂・木戸村の間にあった。明治27年、信濃川の逆流防止のため、本馬越に栗ノ木川逆流防止閘門を設け、本馬越から焼島潟へ新栗ノ木川を開削した。



図-36 石山村地図(出典：新潟市合併町村の歴史)

その後、明治から昭和の初期にかけて信濃川流末工事や大津分水の成果で急激に近代港として、山ノ下地区の石油、機械産業始め戦後の天然ガス化学工業が発展し、焼島潟周辺は工場地帯となった。



図-37 昭和23年米軍撮影の焼島潟(出典：国土地理院)

昭和39年に発生した新潟地震による被害は、軟弱な地盤構造である信濃川、阿賀野川の旧河道跡に集中した。そのため通船川をこれまでの「築堤方式」から、津島屋閘門排水機場と山ノ下閘門排水機城を設置しての「低水路方式」を採用しての対策となった。



図-38 現在の焼島潟航空写真(出典：国土地理院)

その後の平成10年の8.4水害による激特事業の採択を受けて排水能力を30 m³/s増強し、合計51.6 m³/sとなった。かつての広大な潟はなくなった、焼島潟の面影は、かつて潟の中央にあったが潟の埋め立てで近くに移動した焼島地蔵と、通船川に架かる焼島橋のみである。

鳥の目で訪ねる新潟の潟-12



砂丘上の松林に囲まれたじゅんさい池(東区)

5-3. 亀田郷 - 鳥屋野潟周辺の干拓

亀田郷は面積の約2/3が標高零メートル地帯であり、かつては「芦沼」と言われる常習的湛水地帯であった。昭和16年、栗ノ木排水機場建設に着手、23年に完成させた。当時東洋一といわれた排水機場により湿地帯を乾田化し、農業生産基盤の土地改良事業を成し遂げた。

丁度その頃、米軍が撮影した亀田郷の航空写真がある。信濃川より阿賀野川にかけての新砂丘列IとIIが東西に伸び、その砂丘帯の上に集落が点在しているのが一目で分かる。戦後50年経つが、現在のデジタル写真にひけをとらない精密度な航空写真である。



図-39 昭和23年米軍撮影(出典：国土地理院)

下図は大正14年作成の新潟都市計画区域図であるが、米軍の撮影した写真と比べても大きな変化はない。



図-40 大正14年作成新潟都市計画区域図(出典：新潟市)

この地図を詳細に見て行くと10もの潟や池が当時存在していたが、現在は鳥屋野潟を残すのみとなっている。かつては小潟、蓮潟(現在の鳥屋野球場)、女池、男池、長池、蓮池、駒池、釣鐘池、馬洗池があったが、現在潟や池は戦後の耕地整理で住宅地となって跡かたも無い。

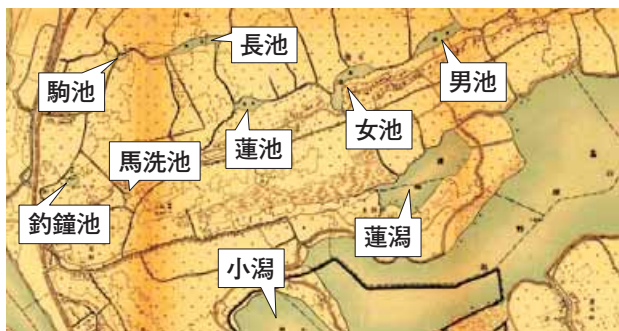


図-41 図-40地図を拡大(出典：新潟市)

潟や池の痕跡を探すと、近くに越後七不思議のひとつ逆さ竹で有名な西方寺があり、道路側に「史跡 吊り鐘池跡」の碑がひっそりと置かれている。

碑文には「現在の西方寺以前の北山浄光寺に檀家が少なく新潟に引越す折、吊り鐘を船にて運びし所水田に没し、約30アールの丸い池となった」と書いてある。

この自然堤防沿いには地域の名称になった「女池」近くの排水路脇に「史蹟 三平池の跡」の石碑はあり、時代の変化により埋めて宅地化しまったことが書かれてる。



図-42 女池にある三平池の碑と碑文(筆者撮影)

これら多くの潟と池は水路で結ばれていた。田んぼには舟で移動した。農家は堀沿いに軒を連ね、玄関前から舟を出して水路づたいに田んぼに通った。戦後の排水機場建設と耕地整理により潟の必要性が薄れてきた。現在の県道・紫鳥線はかつての水路であった。



図-43 現在の鳥屋野潟付近地形図(出典：国土地理院)

鳥の目で訪ねる新潟の潟-13



市民のオアシス鳥屋野潟(中央区)

5-4. 亀田砂丘から消えた池

江南区の亀田から大江山の新砂丘 I の南側に、湧水による 6 つの砂丘池が点在していた。亀田より北山池（兄池）と北山池（弟池）、丸山池（新田池）、駒込池、茗荷谷の池、西山稚児池である。



図-44 大正3年発行5万分1地形図(出典：国土地理院)

西山稚児池は、「大字西山新田地内字金鉢山の巽位に在り、東西八拾五間、南北七拾間、周囲参百五拾壹間五尺七寸、面積壹町九反にして雑魚を産す」、と中蒲原郡誌に記されている。

稚児池のいわれは約 200 年ほど前、池の東側に「サイフク寺」と言う寺があって、その娘＝おチゴさま＝が池に落ちて亡くなった。それ以来「児池」、「稚児池」と呼ばれたという。サイフク寺はその後、新潟へ移ったとか言われている。



図-45 昭和30年頃の稚児池(出典：亀田郷)

昭和 30 年代の写真では砂丘列間の水田より 1 段高い場所に池のあることが分かり、この付近の用水にも使っていたものと推測される。またここは、秋になるとカモが飛来して羽を休める場所であったが、鉄砲打ちが多く来ていたという。

昭和 53 年発行の新潟県文化財調査年報 第 17 「亀田郷」には、「三角形をなし、二辺が約 175 m、他の一辺が 120 m」で、池沿いにはマコモ、ヨシが群生し、湖面にはウキクサ、ヒメビシが見られるとある。だが一方、畑で出る不要な有機物やビニールの不用品、はては家庭の廃棄物や工事のコンクリート塊などが投棄され悪臭を放っていた。水質汚染のため、コイやフナが岸辺に打ち寄せていた。まさに、潟は瀕死寸前と書かれている。

その後稚児池は、昭和 54 年 4 月から建築廃材の処理を兼ねて埋め立てられた。昭和 62 年、池の跡地を含む周辺 20 町歩を対象に、農村基盤整備事業で整然と区画整理され平成 2 年度で完了し、池の大半が西山公園となりグラウンドと遊園地になった。かつての池を想像させるものは野球場の片隅にある稚児池の跡の石碑のみである。



図-46 稚児池の跡の石碑(筆者撮影)

茗荷谷の池は現在、新潟市立丸山小学校のグラウンドとなっている。丸山池は畑になり、駒込の池は、工場の敷地になっているが、航空写真で見るとその敷地は、池の形をそのままである。

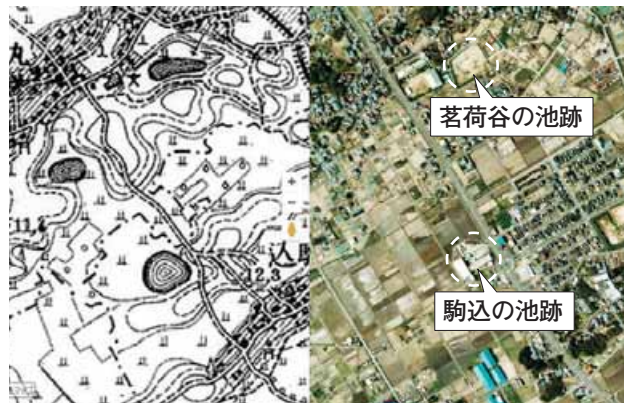


図-47 明治44年地形図と現在航空写真(出典：国土地理院)

北山池（兄池）は昭和 42 年頃、南側の丘を削って畑に変えて分譲した。またその砂で池を埋め、集落の北山グラウンドを作って開放した。これにより亀田砂丘に残る池は現在、北山池（弟池）のみとなった。

鳥の目で訪ねる新潟の潟-14



亀田砂丘に唯一残る北山池(江南区)

5-5. 西蒲原から消えた潟

信濃川、中ノ口川、西川で挟まれた西蒲原は、多くの潟が点在していた。文政3（1820）年新川が開削されて三潟周辺の水吐けは良くなったが、西蒲原最下流部の坂井郷は依然として悪水に悩まされていた。その中でも信濃川と天井川の西川に挟まれた坂井郷の小新、亀貝は、戦後も潟と水路が残っていた。



図-48 大正3年発行の西蒲原地形図(出典：国土地理院)

大正14年作成の新潟都市計画区域図は、昭和10年～29年にかけて合併した鳥屋野村、石山村、松ヶ崎濱村、坂井輪村も旧市内同様に描かれている特徴がある。

その中の坂井輪村から黒埼村にかけて昭和40年代まであった白鳥潟（一枚目潟）、琵琶首潟、二枚目潟、三枚目潟（ガエルマ潟）、的場潟（四枚目潟）がくっきりと描かれている。



図-49 大正14年作成新潟都市計画区域図(出典：新潟市)

的場潟の近くに、縄文時代晩期から中世まで断続に存在していた的場遺跡があり、新潟市教育委員会が発掘調査をした結果、大型の倉庫を含む14棟の掘立柱建築物が見つかった。ここでは漁具や官衙的な遺物が大量に出土している。このことにより、近くの信濃川や西川が漁場であり、官営の鮭魚が行われ、流通まで管理することまで行われたと推測されている。

戦後国は、食糧確保の為、昭和22年西蒲原の国営による新川農業水利事業をスタートした。用水系統を末端まで整備、緻密な用水・排水路網を築いていった。

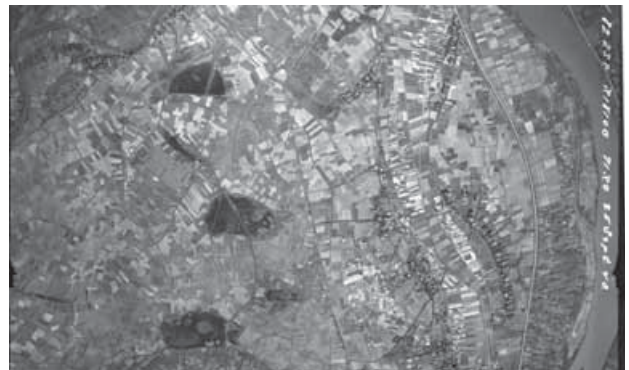


図-50 昭和22年米軍撮影(出典：国土地理院)

小新でもこれら4つの潟を結ぶ排水路を整備し干拓しようと、昭和28年小針排水機場を稼働させた。これにより西川の流末で信濃川に挟まれた地域の乾田化は進んだ。だが舟で潟から潟を通り、西川にも出ることが不可能となった上、農業にも必要とされなくなった潟は人々から忘れられていった。



図-51 治水地形分類図(出典：国土地理院)

昭和30年代になり地盤沈下がこの地でも進み、36年の洪水で被害を受けたこの地を、関屋分水事業で出た膨大な土砂で埋めることになった。そして昭和42年白鳥潟は埋め立てられ県立新潟工業高校となり、琵琶首潟は県警察学校が建ち、二枚目潟は宅地となった。黒埼町のゴミ焼却場であったガエルマ潟は、工場と広域農道となった。一時競馬場移転の候補地であった的場潟は、新潟市流通センターとなり、この地がかつての潟を偲ぶものはなくなった。

鳥の目で訪ねる新潟の潟-15



佐潟のすぐ側にある御手洗潟(西区)

5-7. 現在の新潟市の16潟

新潟県立文書館に、鳥瞰図法を用いて越後国全体を描いた越後輿地全図（全5枚）がある。これは江戸時代後期の文化13（1816）年に新潟町人の草間文績が、これまでの地図が不完全であったため、越後国中をまわり、山、郡境、郷村、駅路、古蹟などを探索し、地勢の方位、分界を実測し、新しく絵図を調製したものだ。絵図には、村（集落）、小字の読みや、川や渡し、橋、潟、池、沼、堀の名前などが色分けし緻密に描かれ、江戸時代後期の越後を知る上では欠かせない地図である。

新潟市は現在、歴史的に人々と関わりの深い水辺空間の16の潟を、新潟の里潟と認定している。この絵図から現在の潟を見て行くと、現在の16潟中10潟（内沼潟は福島潟内、清五郎潟は鳥屋野潟内）が描かれている。つまり現在の16潟の6割強が江戸時代後期には存在していたのである。また、現在の新潟市内で読み取れる潟や池は51を数えた。

越後輿地全図には、西蒲原の西川と信濃川の合流部のデルタ地帯や中蒲原の信濃川と通船川、阿賀野川に囲まれた横越島の下流付近に、多くの潟が描かれている。

では現在の潟がどの様に描かれていたのかと見て行くと、じゅんさい池と御手洗潟の表記が現在と違っている。



図-56 越後輿地全図のじゅんさい池(出典：新潟県立文書館)

現在のじゅんさい池は「ドスカ窪池」と書かれ、御手洗潟は「御神水池」となっており、お互いの潟や池の性格を言い表しており興味深いものとなっている。



図-57 越後輿地全図の御手洗潟(出典：新潟県立文書館)

現在の16潟の中では、清五郎潟の名前が時代によって変化している。寛永16（1639）年の横越絵図など古い地図では「なべ潟」と書かれている。昭和39年発行の「新潟市」最新精密地図でも「鍋潟」と書かれているが、その後、清五郎の地籍にあったことより現在は、清五郎潟と一般的には呼ばれ、地図でもその様に書かれている。時代と、潟の置かれている状況の変化で名前も変ることがある。

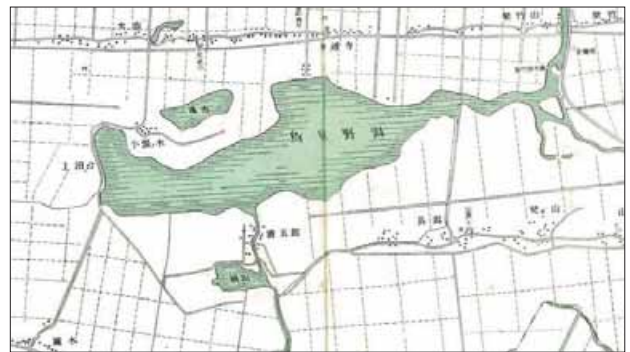


図-58 昭和39年発行「新潟市」最新精密地図の清五郎潟(出典：新潟県立図書館)

表-6 現存する16潟の履歴(出典：筆者作成)

現存する新潟市の潟		越後輿地全図 1810年頃測量	2.5万及び5万地形図 明治44(1911)年測量	戦後の空撮写真 1945～1948空撮	現代の地形図 2001～2007測量	
1	北区	福島潟	福島潟の記載あり	福島潟の記載あり	福島潟の記載あり	
		内沼潟	福島潟の一部	潟も名称も記載なし	現在の潟はある	潟と名称の記載なし
		十二潟	古河跡と記載	潟はあるが記載なし	現在の潟はある	潟はあるが記載なし
		松浜の池	まだ池は無かった	まだ池は無かった	まだ池は無かった	池はあるが記載なし
5	東区	じゅんさい池	ドスカ窪池と記載	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
6	中央区	鳥屋野潟	鳥屋野潟の記載あり	鳥屋野潟の記載あり	現在の潟はある	鳥屋野潟の記載あり
		清五郎潟	鳥屋野潟の一部で湿地帯	潟はあるが記載なし	現在の潟はある	潟はあるが記載なし
8	江南区	北山池	池はあるが記載なし	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
9	秋葉区	六郷ノ池	記載なし	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
		北上の池	記載なし	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
11	西区	佐潟	佐潟の記載あり	佐潟の記載あり	現在の潟はある	佐潟の記載あり
		御手洗潟	御神水池の記載あり	御手洗潟の記載あり	現在の潟はある	御手洗潟の記載あり
		ドン子池	池はあるが記載なし	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
		金巻の池	池はあるが記載なし	池はあるが記載なし	現在の池はある	池はあるが記載なし
15	西蒲区	上堰潟	上関潟の記載あり	上堰潟の記載あり	現在の潟はある	上堰潟公園の記載あり
		仁箇堤	池はあるが記載なし	堤はあるが名称なし	現在の堤はある	堤はあるが名称なし

5-8. 江南区阿賀野（旧焼山）地区

新潟市江南区に、阿賀野川を隔てた飛び地がある。旧横越町阿賀野（焼山）である。大正4年まで陸続きであったが阿賀野川の河川改修で、蛇行していた阿賀野川をショートカットしたため飛び地となった。



図-59 阿賀野川右岸にある焼山(Googleマップ)

この地は、阿賀野川が平野に出て蛇行を繰り返した痕跡が多数ある場所であり、唯一小阿賀野川へ分岐する場所である。松ヶ崎掘割開削で、阿賀野川の河口が松ヶ崎に変わった。その対策として新発田藩はここで各種の河川改修を行ったが、元のように流れることはなかった。



図-60 大正3年の横越村沢海付近(出典：国土地理院)

阿賀野川は会津からの重要な舟運路であった。イギリスの旅行家、探検家であるイザベラ・バードが、明治11年、東京から北海道まで旅した際、津川から新潟まで阿賀野川から小阿賀野川を舟で通っている。

能代川と小阿賀野川が合流する近くに木津がある。木津は「材木が集まる港」として栄え、小阿賀野川の河川交通の要衝であったが同時に最も堤防が決壊しやすい危険個所で、江戸時代13回も破堤していた。

大正2(1913)年8月、木津切れで浸水戸数1,440戸、死者2名の大洪水が起きた。これを契機に、阿賀野川が直轄河川に編入された。大正4(1915)年7月、阿賀野川の洪水防止を目的に、内務省直轄による阿賀野川の改修工事が実施された。馬下から河口までの約35kmの川幅整理、両岸堤防の補強と無堤地の新堤築堤、河積不足個所の掘割と浚渫、中流部沢海付近の大屈曲部の直通、小阿賀野川分岐点万願寺に閘門及び水門設置など大規模なものであった。

この改修工事で移転する住宅が500戸ほどあった。阿賀野川左岸で小阿賀野川入口の万願寺集落では115戸のうち107戸が移転する大規模のものであった。



図-61 昭和27年米軍撮影(出典：国土地理院)

この河川改修により沢海の焼山地区は阿賀野川の対岸にぽつんと残ることになった。そして、これまで阿賀野川から小阿賀野川に分岐していた場所に万願寺水門と万願寺閘門が設置されると亀田郷の洪水もなくなった。

その後、かつての小阿賀野川の河道跡は堤外地となり、高水敷に残る水面は、本川と連続する河跡湖となった。

5-7 17番目の潟となるか？「焼山地区ワンド」

この河跡湖は昭和初期には豊富な湧水があり、絶滅危惧種ニホンイトヨの産卵場でもあった。

阿賀野川河川事務所は、焼山地区ワンドの湿地再生を目指し、有識者や地元NPO等からなる「阿賀野川自然再生検討会」を設け地域住民の懇談会を行ってきた。

現在のワンドは湧水の溶存酸素量が非常に低く、鉄分が多く溶け込んでいるため赤水現象が確認されている。これを解決するため文献調査、試掘調査、水質調査、水位調査を実施し、ワンドの再生にはかろうじて残っている中流、上流の両たまりの保全・活用が重要となった。

阿賀野川の歴史を伝える潟として、新潟市17番目の潟になって欲しいものである。

鳥の眼で訪ねる新潟の潟-番外編



阿賀野川右岸の飛び地に残る焼山ワンド(江南区)

6. 「潟」は新潟人の財産ではなかったのか

新潟市は信濃川、阿賀野川が形成した三角州地帯の沖積平野の上で、随所に潟の広がる低湿地帯であった。そして潟は大雨が降った際の湛水を貯めておく遊水地であり、用水の為のため池の役目をはたしていた。

越後の湛水は悪水と呼ばれ、いかにして早く下流に流して被害を少なくする対象でしかなかった。だが、潟に生息するフナやコイ、ウナギやヒシ、蓮根などの産物は、重要な蛋白源の補給であり、収入源でもあった。

明治以降、特に大正時代から蒸気機関による排水機場が作られ、湛水地帯の乾田化が図られた。だがそれは部分的なものであった。戦後は国営事業として圃場整備と排水機場が設置された。蒲原平野の排水路網の整備により、遊水地の役目を終えた潟は干拓され田んぼとなった。そして全国屈指の米生産高を誇る蒲原の美田が出来あがった。それは、食するため、生きて行くための長い年月の干拓工事であったと思う。



図-62 鎧潟干拓後(出典：西蒲原土地改良史 写真集)

役目を終えた潟はゴミ捨て場となったり、埋め立てられて、住宅地になった。今回新潟の潟が消えて行った過程を見てゆくと、排水機場の設置による乾田化と、食糧増産の農業政策及び経済の高度成長が、新潟の潟を消した最大の要因ではなかったかと思う。

新潟人は「堀」と同様に「潟」についてそれ程、愛着心はなかったと思われる。昭和30年の新潟大火後やその当時起こった地盤沈下により新潟市の西堀、東堀の水の流れも少なくなり、堀は汚れていった。昭和39年の新潟国体に合わせ、道路整備は近代化と思いこみ、ためらいもなく新潟の遺産であった堀を全て埋めてしまった。

新潟の地名ともなった「潟」に対しても財産という意識が薄く、排水路が整備され、食生活も豊かになって行く昭和40～50年代にかけて、潟や池は宅地開発の追い風でいとも簡単に埋められていった。

良く言えば「新潟人の時代への対応力」、悪く言うなら「おひとよしであり、風潮に流され易い」ものなのかも知れない。だけどそれで良いのであろうか、潟や池がまぎれもなくあった事実がある。それを探してみると意外な所にその痕跡が残っているのである。

西区の長池のあった場所に建った黒埼病院の外郭は、かつての長池そのものの形である。



図-63 昭和50年の長池 平成21年の長池跡地
(出典：国土地理院)

女池の碑の場所や東区の伊佐池の道路のカーブも、かつてここに池があった事を来た者に、「ここにかつて池があったよ」と呼び掛けている。



図-64 女池の昨今(出典：新潟市、国土地理院)

新潟人でありながらこれまで「潟」について真剣に考えなかった私があった。この原稿を書くに当たり、もう一度市内各地の潟の跡を巡って見ると、私の知らなかった多くの潟や池の痕跡を発見できた。

潟の干拓者の先人が、後世に伝えるため建立した石碑は、私に、潟のうつろいを語りかけて来た。そして小さくても潟や池のひとつ一つに物語があることを知った。また歴史書に書かれていない潟が多いことも知った。

今後は各々の潟に向き合い、再度新潟人とは何か、潟を調べ、新潟のアイデンティティを探っていく私のライフワークが出来たことに感謝いっぱいです。

謝辞

本原稿は平成29年度にいがた市民大学 新潟学コース新潟の水・潟のくらし～水との共生のあゆみ～を受講し、その際調べたことを基にまとめたものです。この原稿を書くに当たり、新潟市歴史文化課、新潟県立図書館、新津市図書館などお世話になりました。また、新潟市潟環境研究所の大熊孝所長より、本原稿の執筆の機会を与えていただきました。皆様、ありがとうございました。

〈参考文献〉

- ・新潟県史 通史編 1
- ・新潟県統計書 明治 16 年
- ・蒲原の意味を知っていますか>
- ・新潟県治水の歴史
- ・越後輿地全図
- ・新潟市史
- ・新潟市の遺跡 新潟歴史双書 2
- ・内野新川 新潟歴史双書 4
- ・新潟砂丘 新潟歴史双書 6
- ・新潟の地名と歴史 新潟歴史双書 8
- ・図説 新潟市史
- ・中蒲原郡誌
- ・新潟市合併町村の歴史 第一～五巻
- ・新潟市合併町村の歴史基礎史料集 石山村報
- ・豊栄市史 資料編 3
- ・黒埼町
- ・巻町史
- ・阿賀野川史 改修 60 年のあゆみ
- ・阿賀野川の変遷
- ・あがの川
- ・ふくしまがた
- ・しんかわ
- ・新潟の歴史を語る (第 7 号、9 号)
- ・蒲原平野の 20 世紀—水と土の近代—
- ・絵図が語る みなと新潟
- ・「亀田郷 1978」新潟県教育委員会
- ・横越町史 通史編
- ・新津市史 通史編
- ・西蒲原土地改良史
- ・近世越後平野の開発について
- ・越後平野のなりたち I
- ・越後平野の 1,000 年
- ・湖沼観測法
- ・湖沼学
- ・にいがたの池沼
- ・黒埼地名考—地名の由来を求めて—
- ・写真集 ふるさとの百年 豊栄・北蒲原
- ・ありし日の鎧潟
- ・新潟地方航空機乗員養成所
- ・ふるさと坂井輪
- ・ふるさとの地名 亀田
- ・写真は語る亀田の百年
- 新潟県
- 新潟県
- 新潟県新発田地域振興局
- 新潟県土木部河川課
- 新潟県立文書館
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市
- 新潟市合併町村史編纂室編
- 新潟市合併町村史編集室
- 豊栄市
- 黒埼町
- 巻町
- 北陸地方建設局 阿賀野川工事事務所
- 北陸地方建設局 阿賀野川河川事務所
- 北陸地方建設局 阿賀野川工事事務所
- 農林省北陸農政局福島潟干拓建設事業所
- 農林水産省北陸農政局新川農業水利事業所
- 新潟市郷土資料館
- 新潟市歴史博物館
- 新潟市歴史博物館
- 新潟県文化財調査年報 第 17 号
- 横越町史編さん委員会
- 新津市史編さん委員会
- 西蒲原土地改良
- 飛田雅孝著
- 新田義信著
- 榎根 勇著 新潟日報事業社
- 地人書館
- 地人書館
- 三富健三著
- 大谷一男著
- 新潟日報事業社
- 古俣近建著
- 新潟地方航空機乗員養成所記念誌編集委員会
- 坂井輪地域学研究会
- 亀田町教育委員会
- 写真は語る亀田の百年写真集編集委員会

かつて存在した潟や池（現新潟市域内）①

かつて存在した潟や池		越後輿地全図 1810年頃測量	2.5万及び5万地形図 明治44(1911)年測量	戦後の空撮写真 1945～1948空撮	現代の地形図 2001～2007測量		
北区	木崎村	嶋見前潟	×	×	×	潟はなし 水田地帯	
	葛塚町	黒山潟	○ 福島潟の一部	潟はあるが記載なし	潟はある	潟はなし ビュー福島潟と水田	
		福島潟	福島潟と記載	潟と名称の記載あり	潟はある	潟と名称の記載あり	
	長浦町	婆さが池	×	×	×	場所特定できず	
		内沼沖	○ 福島潟の一部	潟はあるが記載なし	潟は存在	潟はなし 水田地帯	
		内沼潟	○ 福島潟の一部	潟はなし	潟はある	潟はあるが記載なし	
		濁川村	毘沙門潟	×	×	×	潟はなし
	岡方村	げんじろ池	×	×	×	場所特定できず	
		さら池	×	×	×	場所特定できず	
		十二潟	○ 古河跡と記載	潟はあるが記載なし	潟はある	潟はあるが記載なし	
	松ヶ崎濱村	松浜の池	×	池はなし	池はなし	池はあるが記載なし	
古河(花月池)		×	潟はあるが記載なし	潟は存在	潟はなし 新潟空港管制塔付近		
東区	大形村	新田池	×	池はあるが記載なし	×	池はなし 住宅地	
		赤池	×	池はあるが記載なし	×	池はなし 住宅地	
		才兵衛潟	×	×	×	潟はなし 住宅地	
		神様池	×	×	×	潟はなし 住宅地	
		海ノ天井	×	×	×	潟はなし 畑	
		長潟	×	×	×	潟はなし 畑	
		蓮潟	×	×	×	潟はなし 畑	
		中ノ潟	×	×	×	潟はなし 畑	
		亀池	×	×	×	場所特定できず	
		井浦池	×	×	×	場所特定できず	
		山崎池	×	×	×	場所特定できず	
		じゅんさい池-東池 物見山池	○ ドスカ窪池と記載	池はあるが記載なし	池はある	池はあるが記載なし	
		名は不明	×	×	池はある	こもれびの道	
		じゅんさい池-西池 下中道池	×	池はあるが記載なし	池はある	じゅんさい池(西池)	
寺山北池	×	×	×	場所特定できず			
寺山東池	×	×	×	池はなし 住宅地			
中央区	沼垂町	焼島潟	○ 阿賀古川跡と記載	潟と名称の記載あり	潟は半減	潟は川となり 山ノ下開門付近	
		古湊池	○ 池あり	新潟鉄工所	池はなし	日本海カーフェリー	
		サンベ沼	○ サンベ沼と記載	堀	堀	北葉町道路と緑地帯	
		宮浦池	×	池はある	池は存在	池はなし ホテル	
	石山村	浦潟	×	場所特定できず	場所特定できず	場所特定できず	
		伊佐池	○ 池あり	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		古川ノ跡	○ 古川ノ跡と記載	場所特定できず	場所特定できず	場所特定できず	
		鍛冶山池	×	潟はあるが記載なし	池はある	池はなし 公園	
中央区	鳥屋野村	鍋潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし	潟はなし 商業地	
		利助池	×	池はあるが記載なし	池は存在	潟はなし 商業地	
		新潟市	異人池	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地
		下所の池	×	池はあるが記載なし	池はなし	池はなし 住宅地	
		女池	○ サンベ池と記載	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		男池	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		釣鐘池	○ 池と記載	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		駒池	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		馬洗池	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地	
		蓮潟(前潟)	○ 沼と記載	潟と名称の記載あり	池は存在	池はなし 鳥屋野野球場	
		鳥屋野潟	○ 鳥屋野潟と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在	潟と名称の記載あり	
		清五郎潟	○ 鳥屋野潟の一部	潟はあるが記載なし	潟は存在	潟は半減 天寿園	
		諏訪池	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地と駐車場	
長池	○ ワニガフチ池と記載	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 学校と住宅地			
名は不明	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地			
名は不明	×	池はあるが記載なし	池は存在	池はなし 住宅地			
御駒洗の池	×	場所特定できず	場所特定できず	場所特定できず			
藤巻池	×	場所特定できず	場所特定できず	場所特定できず			
小潟(浦潟)	○ 内沼と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在	潟はなし 下水処理場と住宅地			

かつて存在した潟や池（現新潟市内）②

かつて存在した潟や池		越後輿地全図 1810年頃測量	2.5万及び5万地形図 明治44(1911)年測量	戦後の空撮写真 1945～1948空撮	現代の地形図 2001～2007測量	
56	江南区	オツ池	×	場所特定できず	場所特定できず	
57		岩松池	×	場所特定できず	場所特定できず	
58		四郎次池	×	場所特定できず	場所特定できず	
59		曾野木村	喜惣次池	×	場所特定できず	場所特定できず
60		伴蔵池	×	場所特定できず	場所特定できず	
61		清九郎池	×	場所特定できず	場所特定できず	
62		新池	×	場所特定できず	場所特定できず	
63		早通村	面潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯
64			川根潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯
65			駒首潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし イオン南店
66			長潟	×	場所特定できず	場所特定できず
67			表長潟	×	場所特定できず	場所特定できず
68			浦長潟	×	場所特定できず	場所特定できず
69			長尾潟	×	場所特定できず	場所特定できず
70			浦潟	×	場所特定できず	場所特定できず
71			ひり潟	×	場所特定できず	場所特定できず
72			たてこみ潟	×	場所特定できず	場所特定できず
73			境潟	×	場所特定できず	場所特定できず
74			べら潟	×	場所特定できず	場所特定できず
75			まめのは潟	×	場所特定できず	場所特定できず
76			浦うらや潟	×	場所特定できず	場所特定できず
77			添潟	×	場所特定できず	場所特定できず
78			ふくべ潟	×	場所特定できず	場所特定できず
79			鶴ノ子潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯
80			丸潟	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯
81			萱場池	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯
82			大江山村	北山池(兄池)	○ 池あり	池はあるが記載なし
83		北山池(弟池)		○ 池あり	池はあるが記載なし	16潟のひとつ
84	伝蔵池	×		場所特定できず	場所特定できず	
85	稚児池	○ 児池と記載		池はあるが記載なし	池はなし 神社と公園	
86	若荷谷の池(山辺池)	○ 池あり		池はあるが記載なし	池はなし 小学校グラウンド	
87	丸山池(新田池)	○ 池あり		池はあるが記載なし	潟はなし 畑	
88	大渕潟	×		場所特定できず	場所特定できず	
89	八丁池	×		場所特定できず	場所特定できず	
90	亀田町	美女池	×	池はあるが記載なし	池はなし 住宅地	
91		村中池	×	池はあるが記載なし	池はなし 住宅地	
92		抜潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
93		名は不明	○ 池あり	場所特定できず	場所特定できず	
94		名は不明	○ 池あり	場所特定できず	場所特定できず	
95		泥潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
96	横越村	駒込の池	○ 池あり	池はあるが記載なし	池はなし 光和製作所	
97		水戸池	×	潟はあるが記載なし	潟はなし JAなし選果施設駐車場	
98		長池	×	場所特定できず	場所特定できず	
99		御手洗の池	×	場所特定できず	場所特定できず	
100		蟹ヶ淵	×	場所特定できず	場所特定できず	
101		小池田	×	場所特定できず	場所特定できず	
102		北潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
103		亀池	×	場所特定できず	場所特定できず	
104		寺屋敷	×	場所特定できず	場所特定できず	
105	秋葉区	切所池	×	池はあるが記載なし	池はなし 駐車場	
106		北上の池	×	池はあるが記載なし	池はあるが記載なし	
107		六郷の池	×	池はあるが記載なし	池はあるが記載なし	
108		古川	×	池はあるが記載なし	池はなし 住宅地	
109		親子潟	×	池はあるが記載なし	池はなし 畑地帯	
110		新津市	婆池	×	場所特定できず	場所特定できず

かつて存在した潟や池（現新潟市域内）③

かつて存在した潟や池		越後輿地全図 1810年頃測量	2.5万及び5万地形図 明治44(1911)年測量	戦後の空撮写真 1945～1948空撮	現代の地形図 2001～2007測量		
111	秋葉区	金津村 若宮潟	×	場所特定できず	場所特定できず		
112		小須戸町	畑ヶ崎潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
113			わかみや潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
114			ながとう潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
115			頭なし潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
116			大日潟	×	潟はなし	潟はなし	
117			鎌倉潟	×	潟はなし	潟はなし	
118			荻川村 小合村	大潟	×	場所特定できず	場所特定できず
119		八丁潟		×	場所特定できず	場所特定できず	
120		親子潟		×	場所特定できず	場所特定できず	
121		丸潟		×	場所特定できず	場所特定できず	
122		大月潟		×	場所特定できず	場所特定できず	
123		すひ潟		×	場所特定できず	場所特定できず	
124		根岸村		太婦潟(専菜潟)	×	潟はあるが記載なし	潟はなし 国道と住宅地
125	向嶋溜池		×	潟はあるが記載なし	潟はなし 水田地帯		
126	大郷村	田邊池	×	場所特定できず	場所特定できず		
127	南区	白根町	白蓮潟	×	潟はなし	潟はなし 水田地帯	
128			深潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
129			大潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
130			山刀潟(ナタ)	×	場所特定できず	場所特定できず	
131			小潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
132			三枚潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
133			杉名潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
134			作蔵潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
135			鯨潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
136			鴨池	×	場所特定できず	場所特定できず	
137			河根潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
138			味方村	オジ池	×	場所特定できず	場所特定できず
139				千野潟	×	場所特定できず	場所特定できず
140			鷺巻村 白井村 小林村 庄瀬村 茨曾根村	上道潟(嵐潟)	×	水田地帯	水田地帯
141	下道潟(道潟)	×		水田地帯	水田地帯		
142	天野潟	×		場所特定できず	場所特定できず		
143	はず潟	×		場所特定できず	場所特定できず		
144	出来潟	×		場所特定できず	場所特定できず		
145	新飯田村	切れ込		×	場所特定できず	場所特定できず	
146	西区	坂井輪村		白鳥潟	○ シロトリガタと記載	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 住宅地と県立工業高校
147			琵琶首潟	○ ビワクビ潟と記載	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 新潟県警察学校	
148			二枚潟	○ 二枚目と記載	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 住宅地	
149			三枚潟(ガエルマ潟)	×	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 流通センター	
150			的場潟	○ マバカタと記載	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 流通センター	
151			ベトナム池	×	池はない	池はない S39新潟地震で陥没、平成頃埋立	
152		黒埼村	大潟	○ 大潟と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在 潟はなし 新潟清掃センターと水田	
153			長潟	×	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 新潟脳外科病院駐車場	
154			丸潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
155			北野場潟	×	潟はあるが記載なし	潟は存在 潟はなし 水田地帯	
156			蒲原小潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
157			木伏潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
158			丸潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
159			川根潟	×	湿地帯の記載	水田地帯	
160			浦潟	○ 浦潟と記載	湿地帯の記載	水田地帯	
161			徳人潟	○ 徳人潟と記載	湿地帯の記載	水田地帯	
162			蜂の尻潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
163			蓮潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
164	熊潟	×	場所特定できず	場所特定できず			

かつて存在した潟や池（現新潟市域内）④

かつて存在した潟や池		越後輿地全図 1810年頃測量	2.5万及び5万地形図 明治44(1911)年測量	戦後の空撮写真 1945～1948空撮	現代の地形図 2001～2007測量
165	黒埼村	手杵潟	×	場所特定できず	場所特定できず
166		雁潟	○ 馬潟と記載	湿地帯の記載	水田地帯
167		えびて潟	○ エビテ潟と記載	湿地帯の記載	水田地帯
168		上熊潟	×	場所特定できず	場所特定できず
169		下熊潟	×	場所特定できず	場所特定できず
170		平柳潟	×	場所特定できず	場所特定できず
171		八枚潟	○ 八枚潟と記載	湿地帯の記載	水田地帯
172		堤潟	×	場所特定できず	場所特定できず
173		諏訪池	×	池はあるが記載なし	池は存在
174		金巻の池(水戸際池)	○ 池あり	池あり	池あり
175		焼鮎の池	○ 池あり	池あり	田畑
176		名は不明	○ 池あり	池あり	田畑
177		長池	×	池はあるが記載なし	池は存在
178		内野町	長潟	×	池はあるが記載なし
179	中野小屋村	六字潟	○ 六字潟と記載	水田地帯	水田地帯
180		田潟	○ 田潟と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在
181		早潟	○ 早潟と記載	水田地帯	水田地帯
182		乳ノ潟(乳潟)	○ 茅ノ潟と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在
183		田の尻潟	×	水田地帯	水田地帯
184		安兵衛池	×	水田地帯	水田地帯
185		赤塚村	佐潟	○ 佐潟と記載	潟と名称の記載あり
186	御手洗潟		○ 御手水池と記載	潟と名称の記載あり	現在の潟はある
187	ドンチ池		○ 池あり	池はあるが記載なし	現在の池はある
188	丸池		×	池はあるが記載なし	池は存在
189	名は不明		×	潟はあるが記載なし	潟は存在
190	丸潟		×	場所特定できず	場所特定できず
191	又太郎潟	×	場所特定できず	場所特定できず	
192	巻町	西沼	×	湿地帯の記載	水田地帯
193		鎧潟	○ 鎧潟と記載	潟と名称の記載あり	潟は存在
194	松野尾村	名は不明	×	潟はあるが記載なし	潟は存在
195		名は不明	×	潟はあるが記載なし	潟は存在
196		上堰潟	○ 上関潟と記載	潟と名称の記載あり	現在の潟はある
197	峰岡村	仁箇堤	○ 池あり	堤はあるが名称なし	現在の堤はある
198		名は不明	×	仁箇堤隣の池	池は存在
199	漆山村	赤池	○ 赤池と記載	水田地帯	水田地帯
200	小吉村	日出潟	×	場所特定できず	場所特定できず
201	潟東村	御封印野	×	湿地帯の記載	水田地帯
202		升潟	×	場所特定できず	場所特定できず
203		嵐潟	×	場所特定できず	場所特定できず
204	月潟村	名は不明	○ 池あり	場所特定できず	場所特定できず
205		鳳羽潟	○ ニイダ潟の記載	場所特定できず	場所特定できず